

編集後記

おかげさまで、本機関誌第3号を世に出すことができた。本誌も研究者の間で少し名が知られるようになってきたせいも、今年は17本の投稿をいただいた。第2号の6本に比較して、約3倍の伸びだった。誠に有難いことで、投稿された各位のご協力に敬意と謝意を表したい。

投稿作品は、量もさることながら、質の面でも力作揃いだった。そのため、論文審査委員会の先生方に、選考にかなりの時間と心労をかける結果となった。論文審査の諸先生に対し、改めてお礼申し上げる次第である。審査委員会の厳選の結果、「投稿論文」として6本、「研究資料」として2本、採用させていただくことにした。第3号の投稿作品は、医療から福祉までカバーする領域が広く、テーマもバラエティーに富んでいる。各方面の方々にお読みいただければ幸いである。

「依頼論文」としては、南部鶴彦学習院大学教授と西村周三京都大学教授にご執筆を賜った。南部教授は第1号に続いて2度目の執筆であり、西村教授は留学先の英国のヨーク大学からわざわざ原稿を送っていただいた。両先生の努力と協力に感謝を申し上げる次第である。

当研究機構内からは、「巻頭言」の執筆を副会長の宮澤健一橋大学名誉教授にお願いした。また、「研究ノート」として、当研究機構のスタッフである後藤卓史主任研究員及び森口尚史調査部長に、最近の研究成果の一端を発表してもらった。なお、編集委員の総意で新しく「書評」欄を設けることにした。第1回目に取り上げた書物は、最近各方面から注目されている「医療保障と医療費」（東京大学出版会）である。幸い広井良典千葉大学助教授の玉稿をいただき、好スタートを切ることができた。これから書評欄の一層の工夫と充実を考えていきたいと願っている。

また、編集委員会の席上で、本誌のサイズが大きすぎるという意見が出された。編集委員会で話し合った結果、第3号から一般の学術雑誌なみのやや小型のサイズに改めることにした。

本誌は、まだ誕生したばかりである。これからも、各方面のご意見・ご批判を謙虚に拝聴して誌面の構成・内容に新しいものを取り入れ、より充実した機関誌に育て上げるべく努力したいと思う。各方面のご協力・ご支援を心よりお願いする次第である。

(編集委員長 上條俊昭)